

百年目の「春の祭典」

ストラヴィンスキーというロシアの作曲家をご存知でしょうか。彼の代表作に「春の祭典」というバレエ音楽があります。20世紀近代音楽の最高傑作とも言われています。しかし、複雑なリズムや不協和音に満ちたあまりに革新的な音楽だったためか、1913年5月にパリで行われたその初演は、野次、罵声が飛び交い、けが人も出る程の大騒動となったと語り継がれています。この衝撃の初演から、今年ちょうど100周年の記念の年に当たります。

いよいよ3月20日から瀬戸内国際芸術祭2013が始まります。今回は、春、夏、秋の3期の分散開催です。初演から100年目に、音楽から美術に形を変えてこの瀬戸内の地で「春の祭典」が再演され、それが世界に大きく発信されます、という大げさでしょうか。

この芸術祭に併せて、高松市でもさまざまな関連イベントを展開して芸術祭を盛り上げることをしています。その一つとして、昨年国の重要文化財に指定された玉藻公園の「被雲閣」を会場に、地元の食材を取り入れた会席料理を、地元漆芸家や陶芸家が制作した器などを使い、ご賞味いただく「さぬき匠の雫」を開催します。会場内には、盆栽や庵治石作品を展示するほか、大書院において和太鼓など地元の伝統芸能を披露することとしています。

民間主催の各種イベントも花盛りで、芸術祭との相乗効果で盛り上がることと思います。中でも音楽の一大イベントとして、「日本フルートコンヴェンション」が8月にサンポートホール高松で開催されます。日本フルート協会が2年ごとに開催する大会で「フルートの祭典」ともいうべきもの。国内外のフルーティストはもちろんのこと、関連する音楽家、愛好家、製作者、関連各社など、フルートに関わるすべての人がフルート王国香川に一堂に会します。

楽曲「春の祭典」の演奏では、珍しいアルト・フルートを含めた管楽器群が大活躍します。「日本フルートコンヴェンション」が芸術祭と併せて、さながら「夏の祭典」として大いに盛り上がり、その勢いがそのまま「秋の祭典」へと続き、大団円となることを期待しています。